中国の鬼神と日本の善鬼

廣田　律子

今回奥三河花祭りを対象として調査研究を開始したが、私個人としては長年研究テーマとしている中国との比較を行ないたい。手始めに日本と中国の祭りの場に仮面を着けて登場する鬼神について、その仮面と語りを取り上げ比較を試みることで、鬼神の帯びている性格の同質性について論じたい。

第一節　中国の鬼

仮面上の威嚇の表現は、憤怒の表情ともいえるのだが、眉間にぐっとしわを寄せ、目をカッと見開き、髪やまゆげを逆立て、鼻を膨らまし、口はぐっと閉じる物と反対に大きく開けて歯列を見せ牙をむく物、舌を出す物がある。見る者を慌てさせ驚かせ肝を抜かせるような威嚇の表現である。

何に対して威嚇を試みる必要があるのかといえば、威嚇する対象はこちらに種々な不幸をもたらす存在である。不幸とは疫病の流行、作物の不作、子が授からない、短命であること等である。種々な不幸の原因は、不幸をもたらす存在にあるとされ、その存在は人格をもって表わされるが、姿を現わさない。例えば疫病の原因をウィルスにあると考えるのではなく、疫神の仕業と考えるのである。

不幸をもたらす存在への対応はといえば、平和的な対応と攻撃的な対応がある。平和的とは、供物を捧げ芸能を奉納し祭りをして良い気持ちにさせて、すみやかに村を過ぎ越して行って貰おうとするやり方である。一方の攻撃的対応とは、法具を用い、祓い清めの戦闘的な所作を行なうことによって、村から早々に追い出してしまおうというものである。

いずれにしろ一つ対応を誤れば、病気が流行し、家畜が増えず、子授かりもままならず長寿を全うできなくなってしまうと考えられている。不幸をもたらす存在を撃退する為には人間だけの力ではとても対応しきれず、強い助っ人が期待されるのである。そこで不幸をもたらす存在から人々を守ってくれる存在として一番身近に感じられている神々が、正月の祭りに仮面を着けて登場してくれるのである。その強いパワーをもつ神々の代表が鬼神である。

第一項　開山

最初の鬼神は、貴州省の少数民族のトウチャ族の「開山」という面である（写真１）。「開山」はその名の通り山を開く神である（写真２）。日本の奥三河の「榊鬼」も斧をもって登場するが、同じように中国の「開山」も斧をもって出て来る。中国の面が日本の面と決定的に違う点として注目されるのは目である。

中国の面は、目が出ている。また黒目が開けられていない。日本の面は着けている演技者たちの舞う不自由を考え、大抵黒目が開けられている。ところが中国では、演技者にとっては大変不自由なことだが、穴が開けられているのは、目の下や、白目や、鼻のわきや鼻の穴とかである。被る者のことは考慮されず、むしろこの鬼神がもっている目の力、つ

まり呪力をもつ眼を大事にした造形である。

鬼神の役割は、主に祓い清めに置かれている。祓い清める対象は、見えない悪霊である。であるから、見えないものを見通す能力が必要なのである。先に流行したSARSではないが、正体が判ると処方箋も出せるが、正体が見えないと、対応の仕方が分からずとても恐ろしい存在となるわけである。この鬼の大事な役割は、まず相手の正体を暴いて撃退するということにある。この目はその為に必要な呪眼の表現なのである。目が前にグッと飛び出ていたり、黒目を残していたりする造形がとられる。もちろん牙が出ていたり、眉間にしわを寄せていたり、角もあるが、一番必要とされているのがこの目の造形といえる。

次の貴州省のコーラオ族の「開山」は額にも目があり（写真３）、第三の目をもつ。目がたくさんあるというのも呪眼の一つの表現で、広範囲を見通せるということだ。この面は最近作られた物である。少数民族の面は、大半が文革の時に燃やされてしまい、多くは新しい物である。文革は一九六六年から一九七七年までの約十年であったので、人々は造形的には古い面を忘れることなく覚えていた。後に作り直す時には大事な要素は失われずに復原されたのである。

次は江西省漢族の「開山」である（写真４）。大きく丸い目を飛び出させ、目の縁がくり抜かれていて、歯列を見せている。「イーッ」と歯を食いしばって見せているのは、威嚇しているのである。戦う神であるので、こういう表現がされているのである。

写真1

写真2

写真3

写真4

写真5

次の写真は江西省漢族の村で実際に悪霊を退散させている場面である（写真５）。松明が先導し、その後に「開山」が扉のところにいる。手には鎖をもっていて、あちらこちらバンバンと打ち付けて回る。この音で脅かし、家中の悪霊を引っ張り出して来て退散させるという場面である。

第二項　鬼

次の青い面は江西省漢族の大鬼である（写真６）。この大鬼は側転をしたり動きが激しい為、黒目を残してはおけないので、目の中央は開けられているが、周りに金が入れられており、やはり一種の呪眼の表現である。日本の面にも金が入っている物があるが、これもやはり呪眼を表わす為といえる。この大鬼が悪霊を追い払っているのが次の写真で、手印を結んでいる（写真７）。

次の江西省漢族の鬼は、横から撮った物だが、このように目を飛び出させている面は大変めずらしい（写真８）。この面は舌を出しており、「あっかん、べー」と、これも相手を威嚇する表現である。

次の江西省漢族の鬼は、まるで新体操をやっているような雑技をする鬼である（写真９）。竹を組んだ高い棒の上で猿のような動きをし、滑稽な面もある、見る人をドキドキさせる曲芸的なことをする鬼である。

写真6

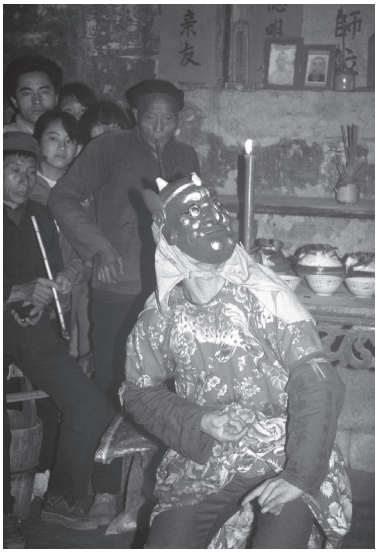

写真7

写真8

写真9

写真10

次は子どもに酒を与えている江西省漢族の鬼である(写真10)。実際は酒は入っておらず、水を与えているところである。下の子どもは、口を開けて待っているのである。この鬼から水を貰うと、今年一年無病息災でいられると信じられている。このように、鬼が無病息災に関わったり、見えない悪を退散したりするという役割で出て来る。この鬼は子どもたちにとっては神さまなのである。ただの知り合いのおじさんが仮面を着け演技をやっているのだと、観客になりきっていられないのである。鬼からこの水を貰わないで今年病気になると困ると、本気で考えているのである。

もともと芸能は、このような祭りの中で神が現れて、神自身が演技をするところから発生したとされるが、ここでは人々は皆、家々に訪れて来た鬼とか翁を神だと思っている。神が年に一度、正月の時期に訪れ、祝福をしてくれ、災いを祓い清めてくれると信じているのである。ただ単に、鬼の所作が面白いから見ているというのではないのである。やはり神さまに会いたい、年に一遍来訪してくる神々に福を授けて貰いたいと思っているからこそ人々は集まっているのである。芸能の本来の姿がここにあるといえる。

第三項　鍾馗

次は江西省漢族の鍾馗である（写真11)。日本でも五月節句に鍾馗の図や幟などを飾る。官吏の風貌をしているが、鍾馗は科挙に失敗して、それを悔やんで死んでしまった人物で、唐の太宗皇帝の御代に太宗が熱病に罹ると、その夢枕に立って、太宗の病気のもとになっていた疫病神をバタバタバタと倒したと伝えられている。後に太宗が病気から治って、「夢にこういう人物を見た」と、絵師に描かせ、お守りとして飾ったというのが鍾馗の図柄を飾る由来である。鍾馗が神として鬼とともに登場するが、この場面では、鍾馗の方が地獄の閻魔さまのように偉く、鬼が家来のような様子で演技される。鍾馗は剣をもっているが、剣や小刀は、この場のものを祓い清める為の法具である。

写真11

以上の鬼神たちは、足を踏んだり、時計と逆順に回転したり、片足で跳びはねたりし、この動きは鎮めが意図されていると考えられる。

第四項　日本の善鬼

中国との比較の意味で簡単に日本の善鬼を並べてみる。

折口信夫が「神々と民俗」の中で悪い精霊を追い退ける鬼としている花祭りの鬼である（写真12)。次は坂部の冬祭りに登場するたいきり面の鬼である（写真13)。両者ともステップを踏み、斧を振る

写真12

写真13

写真14

写真15

い、まさに見えない悪霊と戦っているようである。

次は五條市の念仏寺の鬼走りの父鬼である（写真14）。ここでは父・母・子の鬼が出て来て大松明で悪霊を退散させる。日本の鬼はファミリーで登場することが多い。

次は岩手の黒石寺の鬼子登りの阿の鬼である（写真15）。これも阿・吽のペアがあり、子供が面を背負って秘儀に参加する。

やはりどの鬼面も黒目こそ開けられているものの、目を強調させたり白目に金を入れられたりと呪眼の表現が見られる。相手の正体を暴く目だけでなく、その怒りをこめた表情も邪悪なものを恐れさせる凄さがあり、中国に共通する面の表現を見ることができる。

第二節 日本と中国の鬼の語り

第一項　日本の鬼の語り

祭りの場で、祓い清めをする動作を行なう他、言葉を発し語りを行なう鬼神もいる。その内容からさらに比較を進めていきたい。日本の代表的な鬼神の語りとして、今回調査を行なった奥三河の古戸花祭りの榊鬼と山見鬼の語り、そして坂部の冬祭りの湯立てをする鬼と天公鬼の語りを見てみる[(1)]。

榊問答　花祭り

もどき「やいやい伊勢天照皇太神宮熊野権現富士浅間、所は当所の氏大神、稚児若子の舞い遊ぶ、神御宝前ともはばからず事ざんどしいなりをして踏み荒らす汝は何たる何者にて候。」

榊　「吾等がことにて候。」

もどき「なかなか汝が事にて候。」

榊　「愛宕山の大天狗、比叡（へう）の山の小天狗山々嶽々を渉（わた）る荒霊（あらみさき）荒天狗とは吾等が事にて候。」

もどき「三郎は何万歳を経たるぞや。」

榊　「八万歳を経たるぞや。そういう者は何万歳を経たるぞや。」
もどき「王は九善、神は十善、十二万歳を経たる仏の位と申す。」
「さあらば碌を引かん。此の碌に引き勝ったなれば褒美としてとらす。これより当所の東方にくれし山という千代の御山が立ってまします。まことに信行のためならば引かれる、信行のためでなくば引かれん。引いて帰れ。」
榊　「この榊と申するは、山の神は三千宮一本は千本千本は万本、千枝百枝までも惜しみしこの榊許しにて伐り迎え取ったるぞ。」
もどき「伊勢神明天照皇太神宮熊野権現富士浅間、所は当所の氏大神、稚児若子を舞（ママ）遊ばす千代の御ために伐り迎え取ったるぞ。まことの信行のためなら引かれる信行のためでなくば引かれん、引いて帰れ。」
もどき「ありがたやまことの信行か引いても引かれぬこの榊。」

山見鬼問答
問　「やいやい汝は何たら何者なれば　所は当所の氏大神　宮の稚児が舞ひ遊ぶ神宝前の庭を　事ざんもしいなりをして通るとは」
山見「われらが事にて候か」
問　「なかなか汝が事にて候」
山見「あたご山の大天狗　比叡の山の小天狗　峰々岳々を渡るあらみさきあら天狗とは　我等が事にて候が　千代のへつゐ（竈）脇に千代の御山が立ったと申すで　山見物にまゐって候」
問　「山荒らすなら通すまい。山荒しますまいなら通すべし」
山見「山荒らしは仕らぬ。山見物に参って候」
問　「神妙に見物して参れ」

坂部の冬祭りの湯立をする鬼
一、当在
九デン「ソモソモ伊勢天照皇大神　東ハ浅間神社　所ノ当社ハ氏大神七国ノ御湯ノ十分立ツ所へ　事タクマシイナリヲシテ　オドリクル者ハナニ者ニ候」
きじん「ソモソモ伊勢天照皇太神　東ハ浅間ノ神社　大坂ヨリ西モ三十三ケ国　大坂ヨリ東モ三十三ケ国　合セテ六十六ケ国　東州ハ東海道トテ　南州ハ南海道　東山道ニ山陰道　山陽道ニ西海道　北陸道トテ　道ハ七ツニ別ケラレテ　舟道共ニ八ツノ御道　其内東国東山道へ指（さい）タル道ノ中定ハ信濃ハ信州　諏訪ノ郡　佐久ノ郡　ハニシナ郡、更シナ郡　小懸郡　水内郡　高井郡　安曇郡　筑摩郡　伊那郡ト取ラレタリ　其内伊那郡伊賀　良賀　庄内　関ノ郷小名ニ取リテハ　坂部ト申ス御所　七国ノ御湯ハ十分ニ立ツトアリ　我ハ是諸神ニ使エ奉リ清メ祓ヘトノ此オウセニヨリテ　是迄モアラワレテ　マイ下リタル鬼キ神ヲ　トガメル者ハ何者ニ候」
九デン「トガメル者ハカタジケナクモ伊勢ワタライノ　コオリ　ミモスソ川ノナガレニテ　神ノ父神ノ母　ネギハカセガトガメマス」

鬼　「位クラベヲシマシヤウシマシヤウ」

九デン「ソレホド位ノ高イ鬼神ナレバ　位クラベ　ヲシマシヤウシマシヤウ神ハ十万年　仏ハ九万年　王ハ十二万歳ノ位ヲ得タル者ダガ　鬼キ神ハナン万年ヲエタルヤ」

鬼　「事久シキ鬼キ神ノ事ナレバ鬼キ神ハ　七万ザイ」

九デン「七万年ナラマダ三万年タラヌニヨリテ　此神方前ヲアラス事ハナラヌニヨリ四方諸神　ヲ拝ミ舞返ルガヨカロー」

鬼　「其レナレバ　此神方前ハ太ユウノ者ヨ　此アシワラノ国ノ北国ニ越後ハ越中佐渡ガ島　物ハ　食ハデモヒダルクナシ　イシヤウハキネドモ　寒クナシ　年ハヨリテモカヲニシワヨラヌ　フクキマンプク家ガ島ヘト舞返ル」

九デン「アリガタイヤ　誠ガ神ギヤウ引テモ引カレヌ此榊キ」此時五方ヲ拝ス

天公鬼

一、当在

九デン「ソモソモ伊勢天照皇大神　東ハ浅間ノ神社　所ノ当社ハ氏大神　七国ノ御湯ノ十分立ツ所ヘ　コトタクマシイナリヲシテ　オドリクル者ハ何者ニ候」

天公鬼「我々等ト申シ候得バ　伊勢天照皇大神　東ハ浅間ノ神社　天神七代地神五代　其末三十代ノ後　天公鬼オウトハ我ガ事　事ノ長サヲ申サンバ　九百九十九万九千ト　シルシタマエバ御湯ガシモ　我ハ是諸神ニ使エ奉ル　清メハラエトノ　此オオセニヨリテ　是迄モアラワレテ舞下リタル　鬼天公鬼ヲトガメルハ何者ニ候」

九デン「トガメル者ハ　カタジケナクモ伊勢ワタライノ郡ミモスソ川ノナガレニテ神ノ父神ノ母ネギハカセガトガメマス　位クラベモシマセウシマセウ　神ハ十万歳　仏ハ九万歳　王ハ十二万年ノ位ヲエタルニ　鬼天公鬼王ハ何万歳ノ位ヲエタモウ」

天公鬼「事久シキ鬼　天公鬼王ノ事ナレバ天公鬼王ハ　七万歳」

九デン「七万年ナラマダ三万年タラヌニヨリテ　此神方前ヲアラス事ハナラヌニヨリ引木杖ヲ太夫ニ御渡シ」

天公鬼「此七ツノユワレノアル杖ヲ　メウツタムシウ（滅　多無性）ニ太夫ニ渡シテナル物カ　ユワレヲ聞キタケレバ話シテ聞セル」

九デン「ユワレヲキキマシヤウ」

天公鬼「昔東方朔天ジクヨリ此アシ原ノ国土切リ　トバシラレタル時ノ桑木ノ杖　桑ノ木ノ本ヨリ　立ヨリテ　本ノ切株コンゴウカイ　ウラノ切口　大ゾウカイ向フ三尺一寸一歩ニ切トバシラレタル　時ノ桑ノ木ノ杖　神ニ金剛杖　仏ニジャ前ノ杖　人間ニ力杖トテ　此七ツノユワレノ有ル杖ヲ　メツタムシヤウニ渡シテナルモノカ」

九デン「ユワレハキイタガ此引木杖ハネギガアヅカル」

天公鬼「カヤセカヤセ清メテカヤセ」此時五方ヲ拝ム

鬼神はそれぞれ自身がどこから来た何者で、何をしに来たのか、どのような役割をし、どんな宝をもっているかを明かす。榊鬼と山見鬼は、「山々岳々を渡る荒霊天狗」であり、榊神は榊を守る役割をし、山見鬼は、山見をしに来たと分かる。湯立てをする鬼は、日本六十六ヶ国に通じ、祓い清めの為にやって来て、食べずともお腹が空かず、着なくても寒くなく、年をとってもしわが寄らず、富貴万福の佐渡から来たとしている。天公鬼は、伊勢天照皇大神や浅間神社の神に通じる出自で、祓い清めの為にやって来て、由緒正しい桑木の杖をもっているとしている。

この鬼神はもどきやくでんや禰宜と称される司霊者[2]とも導き手ともとれる人物と問答を行ない、どちらが年をとっているか比べ合う。榊鬼は八万才これに対してもどきは十二万才、湯立てをする鬼は七万才、これに対して神を父母とするくでんは十万才、天公鬼は七万才、これに対してやはり神を父母にもつくでんは十万才で、それぞれ鬼神が負けてしまう。

この負けは何を意味しているのかが問題である。負けることにより鬼神が導き手の味方につくようになるのではないだろうか。鬼神を屈服させ味方に引き入れたからには、鬼神のもつ辟邪の力を自在に利用することもでき、その宝さえも得ることができることを示しているのではないだろうか。

早川孝太郎は「さかき」「やまみ」について、振草系月のうたぐら集の中の「舞いこぎ」に、「さかきとはいかなる神と問ふならば　土公神（つちきみかみ）と答へきかせよ」、「やまわりとはいかなる神と問ふならば　須佐之男神と答へきかせよ」とあることを引いて、「さかき」を土公神とし「やまみ」をスサノオとする思想は、相当古くから行なわれていたらしいとしている[3]。鬼は荒ぶる神と習合しているのである。すなわち鬼神は荒ぶる神であり、パワーも大であると考えられた為、味方につけられれば、その力をプラスに働かせられると考えているのである。もしも敵に回したらマイナスに働くわけだから、是非とも味方につけ、その力を利用できればよいわけだが、もし利用できないまでも、悪さをせずに速やかにご退散願えればいいと考えているのではないだろうか。またここで鬼神を屈服させ味方とする導き手の存在は重要であるといえる。

加えて、坂部の冬祭りの鬼神はいちいち傍らの人物に台詞を教わっていたが、この様子は昭和十年代の調査報告[4]でも変わっていない。ここにも鬼神の導き手を必要とする一面が表わされているのではないだろうか。

さらに地域を広げ四国の鬼神の問答を見ていきたい。四国西部の神楽には、ダイバン（ダイバ・大魔）や山王（山主・山探・山翁）などの鬼神が登場するが、呪眼をもち、憤怒を満面に表現した特徴ある仮面が見られる 。また鬼神と神の問答も伝承されている。高知県の本川神楽、津野山古式神楽、名野川神楽を拝見したが、ここでは津野山古式神楽の「悪魔祓」を見ていきたい。鬼神の大蛮は荒ぶる神の象徴として榊をもって登場する。東南西北中央の神々と大蛮の問答を以下に記す[5]。

悪魔祓〈津野山古式神楽〉（高知県高岡郡津野町）

（※文中の◇は空白の意。句読点は◇に置き換え、文末にあったものは削除した。）

○そもそも神代の昔建御雷神斉主神天上のみ使として葦原中津国に天降りましまして
◇万悪魔を平げて神孫降臨し給ふなり
○八幡の父は仲哀天皇なり◇母をば神功皇后と申して◇奈良奈良称し奉る
○風の神の本宮は級津彦命なり◇乾の方に居ます広瀬◇龍田の御神なり
○天地共神明現れましませば◇悪魔の諸共寄らで退く
○美女あらば賤が伏屋に至るまで◇我立ち寄りて悪魔はらはん
○炭の燃え立つほどに思へども◇煙立たねば人は知らまじ
○思ひ切れ心の剣ひとつ立ち◇さらばうき世の習ひなるもの
○剣立つ両刃の山を我踏まば◇峯も平地となりにけるかな
○白金や黄金作りの太刀佩きて◇白刃の町をねるは誰が子ぞ

大蛮　加世が初め奈良志も染めぬ板ふむは
東神　奈良志初めたる板をこそならせ
大蛮　引き初めぬ袖引くは
東神　引きも初めたる袖をこそ引け
大蛮　何と思ふ恨み十五夜の月の光と思ふは
東神　黒雲が四度路茂度路に行く時は月の光もあらばこそ
大蛮　峯の小松と思ふは
東神　谷風イソイソと吹く時は峯の小松ももまれつろうが
大蛮　九重が峠と思ふは
東神　白鷺が羽打ち立てゝ跳ぶ時は◇九重が峠も下へこそなれ◇汝障碍かなわんぞ◇早く従ひ申せ
大蛮　何と申しても従ふまい
大蛮　九千八界三千界大千世界の内を只一時にかけまわり◇神に障碍なすものは某と覚えつろうが
南神　そもそも此の御注連と申するは事も愚にましまさず吉日吉辰を選び定め◇三国相恩の白髯の中より抜出し中臣卜部遠つ祖◇天児屋根命◇忌部の遠つ祖◇太玉命◇天の香山の榊葉を迎へ◇上枝に八坂瓊の五百津御統の玉を取付け◇中枝に八咫鏡を掛け◇下枝に青和幣白和幣を取付けて相恩に御祈り申す◇神は御祈を以って先とする◇日本の道は神道より人道にて治ること明かなり◇汝障碍かなふまじ◇早く従ひ申せ
大蛮　何と申しても従ふまい
大蛮　此の所に廻り千本の大杉原小杉原となりて◇東州へも七十里◇南州へも七十里◇西州北州へも各七十里◇根がさし葉がさし◇指栄えし時◇何として神楽を取治めしぞ
西神　伊冊那岐伊冊那美命◇天の浮橋に立ち天之沼矛を以って尾之古呂島を成したもう◇八百万の神は此の国を御柱として開闢以来億々万々歳までも神国なり
汝障碍かなふまじ従い申せ
大蛮　何と申しても従ふまい

大蛮　四天末方大道じの大辻風小辻風となって◇夜も七夜日も七日吹いつせくつしたる時◇何として御神楽を取治めたぞ

北神　天地未だ葦牙(あしかび)を分たざる麻呂賀礼多留(まろがれたる)こと鳥の子の如し◇宇久茂利(うくもり)て瑞(きざし)を含めり◇天まず成って地後に定まる◇而して後神その中に顕れますや◇国常立尊とは申すなり◇故に国をば神国と云ひ◇道をば神道と云ふ◇汝障碍かなふまじ早く従ひ申せ

大蛮　何と申しても従う(ママ)まい

大蛮　此の所に廻り八丁の大池あり◇丈十六丈の大蛇となりて◇中にざんぶりと浮き亘り◇人間山の素性まで◇呑んでは吹き◇吹いては呑み七度までも◇呑んづ吹つセイツシャクツしたる時何として御神楽を取治(ママ)たぞ

中央神　日本の神風は久方の天津風◇国津神の御はかりとして◇四方八方へ注連を引き◇天岩戸の音左に合して注連と定め右に合して綱と定む◇神道には合掌気恵◇天下泰平世を安穏に治め給ふところ明なり◇汝障碍かなわんぞ早く従ひ申せ

大蛮　十六の大国◇五百の中国◇十千の小国無量の即散国の其内へ此様に障碍なすものは某(それがし)と覚へつろうが

中央神　其れも汝の障碍で更になし

大蛮　それが汝の障碍ぢやわや

中央神　夫れ須左男命の為業にて◇稲田姫由都(ゆづ)の妻櫛に取成し御宇頭(うつ)に指し給ふ所◇足奈槌(あしなづち)◇手奈槌(てなづち)を以って八槽の酒甕(さかかめ)を置き待つ所◇頭は八股あり眼は赤醤酸(あかがち)の如く酒毒に酔ひ伏す処◇須左男命十握の剣を以って寸断寸断(すだすだ)に成し給ふ◇其の時神道六十四本の祓の道具を以て成せば◇如何なる悪意鬼神も納受せずという事なし◇扨如何に鬼神

大蛮　何を鬼神◇鬼神とは

中央神　汝は伊勢天照の御世に罷出◇悪事一切の障碍為すまいと七(なな)巻半の証文を御当社の神前に納め置きしを忘れしかや

大蛮　その様な証文を納め置きし覚へ更になし

中央神　納めある事実正に候へば◇常盤(じょうばん)の鏡の表(おもて)を拝見申されよ

大蛮　御当神の常盤の鏡の表には七(しち)巻半とこそあれ◇七(なな)巻半とは何れに書いてあるか

中央神　七(なな)巻半も七(しち)巻半も同じ事にて候よ

大蛮　もう一度祓を受くれば本の本体に直らば直しでもしょうぜよ

中央神　天津祝詞(あまつのりと)の太祝詞(ふとのりと)を以って敬まって申されよ

大蛮　かしこまって候

中央神　汝は善き宝を持つと承る◇総福揃えて今日の当社御神楽の願主に相渡し申されよ

大蛮　然らば相渡し申す◇受取り候へよ◇先づ一つに福矛◇二つに財の鉾◇三つに五行玉◇四つに志観杖(しかんぢょう)の杖◇五つには五須明の眉作り◇六つに隠蓑に隠笠◇七つに七石入の富の俵と申して◇先づ福矛と申するものをガラリガッタリと打出せば◇金銀米銭も思うにまかせるという善き宝にて候

中央神　善い宝にて候よ

大蛮　二つには◇財の鉾と申するを◇杖に突きて撫廻せば如何なる岩厳石も野平野平(のへらへー)の平地となりてころんでもかやっても土も泥もつかんといふ
　是もよき宝にて候
中央神　善き宝にて候よ
大蛮　三つに◇五行の玉と申するを口に含めば◇春来れど餓(ひだる)うなし◇夏が来ても暑うなし◇秋が来ても腹もへらん◇冬が来ても寒うなし◇これも善い宝にて候
中央神　善き宝にて候よ
大蛮　四つに◇志観杖の杖と申するを◇上から下へ三度すごき降せば生きたる者も死するといふ◇又下から上へ三度すごき上ぐれば◇死したるものも生上ると云ふ◇是も善き宝にて候
中央神　善き宝にて候よ
大蛮　五つには◇五須明の眉作りと申して◇十七八に眉を作れば八十斗(ばか)りにも老すなり◇又八十斗りに眉を作れば十七八にも若やぐといふ◇これもよい宝にて候◇六つには隠蓑に隠笠と申するをズルリ◇スッポリと着すれば上郎の前では下郎とも見え◇下郎の前では上郎とも見ゆる◇これも善い宝にて候◇七つには七石入の富の俵と申して俵を積めば蓬莱の山よりも高く◇酒に造れば泉の御酒となって呑んでも尽せん汲んでも乾かぬといふ◇これが一番善き宝にて候
中央神　参候
大蛮　七つの宝総福揃えて今日の御神楽の願主に相渡し申す◇受取り候へよ
中央神　然らば七つの宝総福揃へて今日の御神楽の願主に受取り候◇其の御礼には汝に一期の職業(すぎはひ)を与へ取らするぞ◇春は当◇夏はリヘイ◇秋はグワヘイ◇冬は外病此の当所当村に入り来る四百四病の病蔓(かずら)のもとを断ち◇汝が七くろの角の間にからめ付けて取らするぞ◇これより丑寅鬼門の方にとって帰りて一期の職業になし給へよ
　是より伊勢内宮外宮廿一社を拝し◇四柱の神を伴い御神楽を取なし給へよ
大蛮　畏って候
中央神　嬉しくも飛び来る玉虫の◇かけばや袖に光輝やく

大蛮は、自分の正体を明らかにし、「九千八界三千界大千世界の内を只一時にかけまわり神に障碍なすもの」と邪魔をする者としている。東神・南神・西神・北神・中央神が服従させようと問答する。「神楽の舞台を杉の木で埋め尽くして舞えないだろう」と大蛮がいえば、西神は「イザナギイザナミの命以来神国であるから邪魔できないから従え」と答える。また大蛮は大蛇に変身して邪魔をするといえば、中央神は、神風が吹き、神道によって天下泰平なので邪魔できないとする。大蛮は十六の大国・五百の中国・十千の小国のありとあらゆる場所で災いを成すとするが、中央神は、スサノオの大蛇退治を挙げ、どんな悪意鬼神も治めるという。その後中央神は悪事一切をしないと誓った七巻半の証文が当社に納められているといい、結局大蛮は神に従うことになる。さらに、金銀米を出す福矛、杖について撫で廻すと岩が平らになる財の鉾、口にすると腹が減らず寒くもならない五行玉、上下に三回振ることで人が生き死にする志観杖の杖、若くなることも老いることもで

きる五須明の眉作り、身分の上下が逆に見える隠蓑と隠笠、俵が山となり酒が泉となる七石入の富の俵の七宝を神に譲る。最後に神から「一期の職業」が大蛮に与えられ、「春は痘病、夏は痢病、秋は疫病、冬は傷寒」の「当所当村に入り来る四百四病の病蔓のもとを断ち、汝が七くろの角の間にからめ付けて取らす」とされる。つまり大蛮は病を引き受けることになる。

大蛮はこの問答の前に、初参りの赤子を抱き、無病息災を祈願する。大蛮は荒ぶる神とされながら、神々との問答に負け、鎮められ、宝を譲り、病を引き受ける等使役される善鬼となるのである。

さらに鍾馗の事例を加える。鍾馗は日本の神楽にも登場し、大元神楽においては「鬼舞」とされる(6)。石見大元神楽本の『御神楽舞言立目録』（文化九年本）には鍾馗と鬼との問答が収められている(7)。

鍾馗は、自分は素盞嗚であり、韓国へ渡り、鍾馗大神と名乗り虚耗を退治したが、人々が困っていると知ったのでやって来たという。舞が入り、鬼が、どういう神かと尋ねると、鍾馗は鍾馗太（ママ）神と名乗り、おまえは何者だと尋ねる。鬼は、自分は四季の種々な病を司って人々の命を取る疫神だと明かす。鍾馗は、鬼に退去しないと命がないぞというと、鬼は鍾馗が守護しようと、自分は日本国の家々に押し入って人々の命を取り尽くしてしまうと答える。

同じく石見大元神楽本の『御神楽之巻起源鈔』は文化初年に手記された物を文政一三年に書写した物とされる(8)。鍾馗の舞のいわれとして、唐の玄宗が瘧疾を患った時に夢に宮中を荒らす虚耗を退治する鬼（鍾馗）を見、その姿を絵師に描かせた。韓国へ渡ったスサノオを鍾馗とし、疫鬼退散の恩徳により一番の舞となったとある。ここでも外来の神の鍾馗はスサノオと習合し荒ぶる神とされ、その強い力故に疫鬼を退治する神と考えられている。

第二項　中国の鬼の語り

さて中国の鬼神の語りは、湖南省安化県の漢族が除災招福を目的として行なう祭りで上演される儺戯の開山神の例である。開山は先に紹介したように江南の中国において漢族、少数民族の行なう儺の祭りに登場する代表的な鬼神である(9)。

『開山科』

家は桃源にあり、斧で妖怪を退治する。施主が請えば、雲に乗り馬を走らせ儺の祭壇に到る。名無しではなく名はある。名無しで通してここに来ようか。父は天宮国の人、母は野王国の人。天上界の神仙が仲人となり結婚した。結婚一年満たずして、母は身ごもった。十月でなく一年お腹にいて、良き年良き月良き日良き時間を選んで生まれる。一時に一人、二時に双子、三時に続けて生まれる。みんなハンサムボーイ。上の兄は、天堂に登り天宮で玉皇のお伴をする。二番目の兄は鬼をやっつけに行く。（水を下る）二番目の兄は水を下って、晶宮で竜王のお伴をする。私は今生まれ、年は取っていて（年は若く）、私は今生まれ年若く、家で田を守る。六月に鉄砲を担いで鬼退治（水を見に行く）、柳の木陰で休む。突然五百人の強者が通り、びっくり仰天する。

突然風が吹きびっくり仰天する。西眉山山上を過ぎ、山上を踏み平らとなり、洞庭湖を進むと海水がひざ頭の深さとなる。みんな慌ててどこへ行くのか。桃源の眼府に行く。（桃源の洞府に行く）洞は眼ではなく、眼はまた洞ではない。（名は桃源仙姑洞）。門外にやって来た。（何が？）四値母朝が来た。（四値功曹）やって来た、急いでやって来た。けつの字は、父だっけ、母だっけ。（父でも母でもない。功徳の功）四値功曹。××家に誠心をもって、お兄さんの夫を祝福し、お兄さんの妻は手紙を受け取る。（誠心をもって、六朝六案の聖霊を祝し、開山郎君に五方の財門を割り開いて貰う）使い物になるかならないか、鑼壇に進んで、働く。桃源眼に座り、十七、十八、十九年、尻が痛くなった。座っているだけで、名が知れる。役に立つか、どうやって来たのか？（唱い、楽を奏で、文王にまみえ、礼楽を奏し、韓信にまみえる）一門をくぐり金を得、二門をくぐり銀を得、三門をくぐり金の柱を得、四門をくぐり銀の瓦を得る。あー（どうした？）鬼怪がいる。（どんな古怪か？）二羽の雄鶏が争っている。（施主の家宝の鳳凰だ）なら悪口をいってやろう。（お世辞をいうべきだ）お世辞、急いで来れば、施主の家に鳳凰がいる。五門で金の鶏が鳴き、六門に鳳凰がいる。あー（どうした？）鬼怪がいる。（どんな古怪か？）二匹の猫がケンカしている。（施主の家宝の獅子だ）なら悪口をいってやろう。（お世辞をいうべきだ）お世辞、施主には男子が産まれ、獅子が球を追いかける。七門に金の獅子、八門に銀の麒麟がいる。あー（どうした？）鬼怪がいる。（どんな古怪か？）二匹の犬が遊んでいる。（施主の家の龍だ）なら悪口をいってやろう。（お世辞をいうべきだ）お世辞、施主には男子が産まれ、学問ができ、龍が球と戯れる。九門に九の鍵、十門に神がいる。門を進み、神に詣でる。進むと肥桶に糞。（尊神）霊験あらたかな真神、霊験なしの肥桶ではない。（霊験あるなし、全て尊神）我を貶めるべきではない。（お前が神を貶めているのだ）門に進み、間違いを犯す。（礼をする。）門に進み、礼をする。施主の家を掃除するように。（清吉が保たれるように）門に進み神に詣でる。神に敬礼する。全く高貴で、六府の神も納得する。線香を焚き、灯明を点し、稲光のようで、乾坤を鎮める。祭壇の祖先に敬礼し、子孫が守られるように祈る。土地神に敬礼し、豊年満作であるように祈る。人が栄えることを祈る。祖師にも敬礼し弟子が豊かであるように祈る。神に詣でる。落ち込んだ太鼓を敲け。（施主を呼ぼう）施主はどのような牛格か（どのような人格か？）鬚を生やし、綺麗な藍色の上着を着て、紗の帽子を被り、腰には革のベルトをし、黒い布靴を履く。怪しい、怪しい人が施主に報いようとする。施主はその方向を知らない。（上を向いている）施主に報いようとやって来る。天上の紫微星を招く。福徳星を招く。財星を招く。牛の檻に生まれる。（儺の祭壇に招く）開山郎君を招き五方の財門を開いて貰う。開山の斧、鉄で鋳造し、洞庭湖の水で洗う。鯉が三尺跳ねる。五方を東南西北中と開く。福寿を願う。

※（　）内は囃子方の台詞

父は天界、母は地上界の人で、一年身ごもって生まれ兄弟はそれぞれ天界の玉皇と水界の竜王に仕え、自分は桃源に住み、人々の為斧で妖怪退治をし、また五方の財門も開くという。施主の家を褒め、豊作、子孫繁栄等の言祝ぎをいう。開山の語りからは、明らかに

除災招福を行なう鬼神であることが見える。ここでも開山と問答をする囃子方がいて、開山のいう訳の分からない言葉を逐一直したりする。中国の鬼神は日本のように年齢比べをして屈服するようなことはないが、日本のもどきやくでんや禰宜と称される導き手や傍らで鬼神に台詞を教えていた人物に通じる人物が中国の鬼神の傍らにも存在するのである。鬼神にはプラスの方向に使役する人物が必要と考えられているようである。

折口信夫は花祭りの鬼を論じる中で、「此山見鬼と問答をする役があります。鬼――神――と問答をするには、人間の語では訣らないから、通辨役が必要なのです。手草（タゲサ）を持つのは、卽、神の詞を解する事の出來る、神人のしるしで、巫女が榊や笹…」[10]とするがこの神の詞を解する通訳者が鬼を導く役ともなると考える。

祭りの場の招福の語りといえば、翁の語りが思い起こされる。理想的な長寿を全うした老体面を着け、こうあれかしと人々が願うことを並べ言祝ぎを行なう人物である[11]。鬼神の語りからも、花祭りの榊鬼は榊を、坂部の天公鬼は杖等の宝を与えてくれるし、開山も財宝をもたらしてくれると読み取れ、鬼神は人々の幸福に寄与することを約束しに来た福神と解釈できる。つまり鬼神の語りは基本的には翁の語りと同質であると考えられる。

鈴木正崇は、摩多羅神を論じる中で、「翁の形象は、中世の最高神として鬼と対抗する二元的な拮抗の中で形成された。しかし、翁は鬼でもある。鬼は翁の障礙型、翁は鬼の祝禱形かもしれない。そこには祝い壽ぐ存在を隷属性を持つものが担うという緊張関係や危うさがある。対極にあるものの一致、言い換えれば、翁の根底には鬼に通じる流動的な霊性がある」[12]と述べている。形象だけでなくその語りからも翁と鬼の対極にあるものの一致が見出せる。

湖南省の中部に位置し、梅山地区とされる新化県の水車鎮で「和娘娘」と称される祭祀演劇に登場する開山は、鬼神の面を着け、黒の衣服を着、机の上に乗り、のみを取ったり、靴作りを行なったり、小便や大便をする所作を行ない、観衆の笑いを誘い、滑稽役といえる。この開山と囃子方との問答があるのでさらに事例として加える[13]。

開山　甲子乙丑の海中に金、門外に犬が吠えるが誰か。
丙寅丁卯の炉中に火、門外に犬が吠えるが俺だ。
小将の出身を知りたいなら、師郎がもとを話す。
小将はもともとどこの家の者か、どの家の主人の甥か。
誰が仲人をし、誰と結婚するのか。
父母は何人兄弟をもうけ、その兄弟はどこにいるのか。
どこの山で鉱物を出し、どこの山の麓に炉場があるのか。
どんな仙人が鉄を打つことができ、どんな仙人が鋼を作れるのか。
大きな刀を打ち、計ると何百斤か。
ある仙人がつり上げたが、計れなかった。
ある仙人がつり上げたが、計量できた。
三句唱い四句を解する、俺がみんなに解説するので良く聞け、
小将はもともと金家の息子、李家の甥。
張家が仲人となり、李家と結婚した。

西眉山に鉱石を掘り出し、山の麓に炉場を構える。
張広仙人が鉄を打ち、李広仙人が鋼にする。
打った刀は刃が広く、計れば重さは八百斤。
張広仙人が研ごうとしたが、吊るすことができない。
王母娘娘と俺とでやっとこ重い刀を運び、吊るすことができた。
父母には五人の息子がいて、五人兄弟は五方にいる。

座壇師　長男は。
開山　おまえの母親は大脚。
座壇師　兄弟は。
開山　俺の鈞刀は凶器だ。
座壇師　兄さんはどこにいるのか。
開山　あ、（歌う）兄さんは天門の外に住む、天門土地だ。
座壇師　二番目の兄は。
開山　ほかの人に訊いて、俺は知らない。
座壇師　二番目の兄は。
開山　賊をしょっぴけ、俺は行かない。
座壇師　二番目の兄はどこ。
開山　（歌う）二番目の兄は海に住む、順海夜叉だ。
座壇師　三番目の兄は。
開山　山歌を歌え、俺は嫌だ、人を叩くのは怖い。
座壇師　三番目の兄は。
開山　はい。今朝肝を啜る。
座壇師　三番目の兄は。
開山　三番目の兄は白馬廟に住む、判官だ。
座壇師　四番目の兄は。
開山　話が棘なし。
座壇師　四番目の兄は。
開山　包丁は凶器。
座壇師　四番目の兄は。
開山　四番目の兄は橋頭廟に住む、橋頭土地神だ。
座壇師　五番目の兄は。
開山　辛くない、心地よい。
座壇師　五番目の兄は。
開山　（泣く真似をする）
座壇師　何を泣くのか。
開山　（笑う。二度繰り返す）
いえない。
座壇師　何故いえない。
開山　（歌う）五番目は俺、線吊鬼さ。桃源硐で仙娘にお伴する。書状を書いてよ

く拝め。
座壇師　誰を拝むのか。
開山　施主を拝まなければ。
座壇師　どうやって。
開山　（歌う）大きな包み、小さな包みたくさん包んで郎君に供える。書状を書いてよく拝め。
座壇師　誰を拝むのか。
開山　吊馬娘子を拝む。
座壇師　脚馬娘子を拝んでどうする。
開山　脚馬娘子を懇ろに拝み、郎君は戻ってきて三杯酒を飲む。老酒は九十九杯、甜酒は砂糖を入れ郎君にお持ちする。書状を書いてよく拝め。
座壇師　誰を拝むのか。
開山　香燭老爺を拝む。
座壇師　線香蠟燭を拝んでどうする。
開山　（歌う）心をこめて香燭老爺を拝み、祭壇の前に務め、寝起きをし、金炉に千年の火を絶やすな。いつも明るい万年灯。書状を書いてよく拝め。
座壇師　誰を拝むのか。
開山　打鑼師傅を拝む。
座壇師　ドラ打ちを拝んでどうする。
開山　（歌う）心をこめて打鑼師傅を拝み、ドンドン腹に響かせ、陣につき進み、おびやかし、ボロンボロン弦を爪弾く。書状を書いてよく拝め。
座壇師　誰を拝むのか。
開山　厨子師傅を拝む。
座壇師　コックを拝んでどうする。
開山　懸命に厨子師傅を拝み、手足を動かしてきぱきと料理をし、心に染みる料理だ。豚の内臓を酒に漬け、内臓に黄身を添える。いくつかの美味しい料理を郎君に供える。書状を書いてよく拝め。
座壇師　誰を拝むのか。
開山　高功師傅を拝む。
座壇師　高功師傅を拝んでどうする。
開山　（歌う）心を尽くして高功師傅を拝み、米を撒き、洞に上がり、良い日時を選び、主人が娘娘を唱い、年々歳々良くなる。
太鼓を一敲き、天神を驚かす。
太鼓を二敲き、地神を驚かす。
太鼓を三敲き、三元法主を驚かす。
太鼓を四敲き、四値功曹を驚かす。
太鼓を五敲き、五竜捧聖を驚かす。
太鼓を六敲き、六曹六案を驚かす。
太鼓を七敲き、麻羅七姐妹を驚かす。

太鼓を八敲き、八洞神仙を驚かす。
太鼓を九敲き、九州十八洞を驚かす。
太鼓を十敲き、十閑子弟入桃源を驚かす。
座壇師はドラがあればドラを借り、ドラがなければ太鼓を借り、ドラがなく太鼓がなければおまえの皮のドラと太鼓を借りる。（ドラを叩き、棒を振り回し、落とし、ドラに太鼓はやむ）

開山　アラー。
座壇師　小将、どうした。
開山　座壇師、いいにくい。（お尻を撫でる）
座壇師　何がいいにくいのか。
開山　尻が割れた。
座壇師　もともとだ。
開山　以前にはなかった。今割れた。
座壇師　父母から伝えられたもので、他人のも同じさ。
開山　（近くの男の子の尻を触る）分かった。解けた。
座壇師　小将、悪い奴だな。
開山　今家族みんな良心が出てきた。
座壇師　真夜中にどこから来るのか。
開山　桃源洞から。
座壇師　どの神が来るのか。
開山　開山小将がおりて来る。ひとっ飛び。
座壇師　どこに飛んで来るのか。
開山　鶏巴県に飛んで来る。
座壇師　新化県だろ、見ただろ。
開山　アワ時だ。
座壇師　メシ時だ。
開山　そろそろメシ時だ。まだ午後の五時だが、ここで泊まりたい。
座壇師　ここには文書があるのにどうして旅社に泊まらないのか。
開山　この家にはよい娘がいる。だから女主人に宿を借りたい。すぐに歌い出す。君子の弟は唐姓、思いも掛けず食事時にやって来た。娘に一緒に寝てもらいたい。百両の銀子を出すからメシを食わせてくれ。
座壇師　そんなことをいったら女主人は怒るに決まっている。
開山　怒らないし慌てない、こう答える。君子の弟は唐姓、今晩我が家で食事を呼ばれるなら娘は寝てしまった。うちの家畜小屋に雌牛がいるだけだ。
座壇師　女主人はすごい、面白くもないから行こう。
開山　一つ飛び行く。
座壇師　どこへ。
開山　生猪菜へ。
座壇師　仙故寨だろ。

開山　宿を頼む、尼がやって来たので宿を求める。彼女はすぐに堂の門を閉めてしまった。
座壇師　どうする。
開山　尻を打つ。
座壇師　考える。
開山　歌い出す。
座壇師　みんなに聴いてもらえ。
開山　（歌う）一つの四角い堂、井戸が真ん中にある。今晩堂の門が開かないなら門を朝まで敲こう。
座壇師　敲いてどうなる。
開山　彼女は戸が壊れることを恐れ、門を開け、仏堂の長椅子で夜を明かすようにという。
座壇師　本当に長椅子で寝るのか。
開山　（歌う）四角い仏堂、菩薩が真ん中にまします。今夜は茶堂の戸は開かず、鐘を突き、太鼓を打ち、朝になる。
座壇師　鐘突き、太鼓を打ち、彼女は寝られたのか。
開山　早速起きて来て茶堂の戸が開かれ、俺はすぐに入った。彼女は俺に大きな椅子の上で寝るようにいって、すぐに部屋の戸を閉めた。
座壇師　大椅子で寝るのか。
開山　嫌だ、また唱う。
四角い茶堂、竈が真ん中にある。
戸を開けないなら竈に火を着けるぞ。
火は竈に着ける、彼女は石炭を燃やすのは結構、火種は得難いという。
彼女が戸を開けるのを待って部屋に入った。
どうしようもないから部屋の隅で寝なさいという。
座壇師　部屋の隅で寝るのか。
開山　嫌だ、また唱う。
部屋は四角、ベッドが真ん中にある。
今晩ベッドの上で寝させてくれないなら、朝まで糞をしてやる。
ズボンを脱ぎ小便をして部屋中臭くなった。彼女は本当にしょうがないという。
あなたの難儀に接して足だけでもうれしいと俺はいう。座壇師、（はい）疲れた、暗くなった。
座壇師　明るくなった。
開山　明るくなった、行こう。歩いて近い、飛んでは遠い。
座壇師　どこに飛んで行く。
開山　暗闇に。
座壇師　白地という。
開山　そこでたくさん人が集まっているのを見る。ちょっと入ってみる。ニュースを話している人がいる。

座壇師　どんなニュースか聞かせてくれ。

開山　そこには劉姓の栄えた家があり、最近新築し、三人の息子が二人の嫁を取り、上の嫁が左の部屋に、二番目の嫁が右の部屋に、三男は後ろの部屋に寝る。老夫婦は二階に寝る。二階は木の板を敷いた。二人の嫁は子がいなかったので互いに嫉妬した。そこで二人は約束をし、兄嫁が風が吹いてきたというと弟嫁は雨が降ってきたというようにした。二組のカップルは夜の生活を始めた。最初の幾晩かは姑は気が付かず、三男だけはっきり聞いて彼らの戦闘前の暗号を分かっていた。ある日姑は実家に帰り、舅一人で二階に寝ていた。彼女らは風だ雨だと叫んだ、舅は一気に登って板を何回か踏みならして雷だといった。次の朝、三男は素っ裸でアーチ型の橋を庁堂に架けた。二人の嫁は起きて来て見ると罵った。三男は答えず、橋をしっかりと造った。父は嫁たちの罵りがやまないので起きてみると急いで起き、一目見るとやはり三男を罵った。三男は答えた。風が吹く雨が降る雷が落ちるのも結構だが、俺は虹を出したんだ。俺はおさらばする。いちもくさんだ。

座壇師　どこへ。

開山　香主肚皮へ。

座壇師　香主府だろ。小将、（はい）頭を上げて見てみる。

開山　ウム。

座壇師　景色だ。つべこべいわず前を向け。

開山　よし、主人を見つけてくれ。

座壇師　教えよう。老人に出て来て貰おう。

開山　老人が出て来て何をする。

座壇師　老人に礼をしに出て来て貰う。

開山　老人に出て来て貰い、俺がおまえの家に泊まれるようにするのか。一本の足でも乗れれば。

座壇師　小将、めちゃくちゃをいうな。この家は文官の家だぞ。

開山　文の……（主人登場）。

座壇師　小将、遠くは天を見、近くは目の前を見る。

開山　東を探り、西を探りあった。座壇師、三年かかってしっかり見た。

座壇師　しっかり見えた。

開山　座壇師、主人の好相さ。

座壇師　どんな相。

開山　崽相のよう。

座壇師　宰相。

開山　主人は左手を出して見せてみろ。左手は三本長く二本短い。夜中に眠くなり、○○○○○。※

右手を見ると二本短く三本長い。夜は眠く婆娘が恋しい〔お礼を受け取るは略〕。

座壇師　おしゃべりは少なく前を向こう。施主に道を開き仙娘を迎えよう。

開山　ご主人、力を集め、太った子を養うのは吉、俺が力を出し、おまえの力はいらない。障害が生じる。
東方大路を掃き、仙娘を迎える。
南方大路を掃き、仙娘を迎える。
西方大路を掃き、仙娘を迎える。
北方大路を掃き、仙娘を迎える。
中央大路を掃き、仙娘を迎える。
座壇師　大路？
開山　一丈二尺ある。
座壇師　小路？
開山　八尺あまり。
座壇師　兵が来るのか。
開山　やって来る。
座壇師　馬は来るのか。
開山　やって来る。
座壇師　娘娘は来るのか。
開山　ジャージャーおしっこをする。
座壇師　分かった分かった。輿に乗って来る。小将、宝物を施主に送ろう。
開山　手放せない。
座壇師　施主はおまえにお礼をくれた。三年経てばまたくれる。
開山　（歌う）宝はもともと軽くなくはない〔代償ではなく〕、当初は百万翁にも勝る。百万はおまえより小さくはない、今もっと加えよう。
送る。娘娘を宝殿に送る。姉妹は竜壇に座る。
八景神仙は観府に戻り、十閑子弟人は桃源に戻る。
（ドラと太鼓が鳴り、礼をして終わる）
※○○○○○は不明。

内容から見ると、開山は自分は金姓で母方は李姓で、李家の娘と結婚していて、大きな刀子を所有しており、五人兄弟の五番目で、線吊鬼であり、桃源洞の仙娘に仕えていると自己紹介し、祭祀において拝まなければならない対象についていい、また招聘する神々についてもいい、宿を求めて卑猥な話にも及び、祭りの施主を言祝ぐといった内容が見られる。開山は問答をはぐらかし、茶目っ気たっぷりにおどけてわざと間違えたりする。その語りを正しい方向に導いて進めるのは対話の相手太鼓敲き（座壇師）の役である。まさに折口の論ずるもどきの姿である。このような鬼神との掛け合いこそ芸能や文学の原点なのである[14]。この開山は勇ましく武器を振り回し戦う役としてではなく、一見人々の笑いを取る滑稽なおどけた性格が強く表現されている。

同じく新化県の維山郷の祭祀演劇に登場する開山の例を紹介すると、「翻杠」という演目で鬼神面を着けた開山は、二本の竹を十字に組み四人が担いだ上で、猿のような所作をしたり竹の上で立ったり、竹を鉄棒代わりにして回ったり雑技のような動きをし、人々が

ドキドキする場を演出している。

以上の例からは人々を楽しませる導き手に導かれる滑稽な開山を見ることができる。開山は祓い清めを行なう祭祀性を弱め、人々への言祝ぎや滑稽な所作を行なう観賞性を強めているといえる。折口信夫は芸能の発生は神祭りの場にあるとし、[15]来臨した神と土地の精霊との信仰的、呪術的な行動動作が芸能を生むと考えたとされるが、まさにこの開山にその片鱗を窺えると考える。

中国と日本の民間の祭りで伝承されている様々な鬼を見てきたが、最後にまとめていきたい。

東アジアの鬼神面のもつ威嚇の表現とはやはり眼に現わされ、目をかっと見開き、不幸の元凶の正体を暴こうとする表現である。呪力を具えた呪眼だが、呪眼とは凡人の目には捉えられないものを見抜く力をもった眼といえる。不幸を為すものの正体が何であるか分かってしまえば、相手に勝ったも同然といえる。正体が分からないと対応のしようがないからである。正体を突き止める能力をもつ眼が呪眼である。もう一方で忌々しい邪悪な視線、つまり邪視に対抗する能力をもつ眼ともいえる。視線をバチバチ交わす戦いに眼で勝たなければならないと考えられているのである。

見えない不幸を為すものを恐れるゆえに不幸のもとを断つ為に鬼神を味方につけ、その強いパワーで相手を撃退してもらい、幸福を得ようとする。しかし、強いパワーをもつ鬼神は味方につければ頼もしいものの、祀り方を間違えると手に負えない存在ともなりかねない厄介な存在である。それゆえに時を定め、祭りの場を整え待ち受けるのである。恐ろしい風貌をした鬼神は村の家々を訪れ、不幸を為すものを逐い祓ってくれる。

一方鬼神の語りからは、人々の幸福をもたらす福神としての面が見出せ、これは基本的に翁の語りと同質であると解釈でき、この点も日中に共通するといえる。

東アジアの人々は、信仰する神々や祖先を呼び出し、面を着けて現実に登場させ、神々が実際に目に見えない邪悪なものと戦ったり、豊作を演じて見せたり、めでたいことを言葉にしたりすることで、その場の平安が約束されたことを確かめなくては納得できないのである。

（１）東栄町誌編集委員会『東栄町誌「伝統芸能編」』 2004年　98 ～ 99頁　藤本典子「花祭り冬祭りに見る鬼の形象」『神話り研究』2号　1987年　48～70頁

（２）この司霊者は岩田勝が『神楽新考』1992年　名著出版社　第四章において、巫者と司霊者がセットで登場することを述べている中で使用された用語である。

（３）早川孝太郎『花祭』岩崎美術社　1966年　184 ～ 185頁

（４）本田安次「信濃三河の霜月神楽」『本田安次著作集日本の伝統芸能』第六巻　錦正社　1995年　262頁にも鬼神が言葉を覚えておらず、側にプロンプタァがついているとある。

（５）高知県立歴史民俗資料館編『鬼—展示解説資料集』高知県立歴史民俗資料館　2005年　203 ～ 204頁

（６）牛尾三千夫『神楽と神がかり』名著出版　1985年　99頁

（７）芸能史研究会『日本庶民文化史料系成』1巻　神楽・舞楽　1974年　103頁

（８）芸能史研究会『日本庶民文化史料系成』1巻　神楽・舞楽　1974年　118頁

（９）廣田律子『鬼の来た道＊中国の仮面と祭り』玉川大学出版部　1997年　156 ～ 161頁に紹介した。

（10）折口信夫「山の霜月舞」『折口信夫全集』17巻　中央公論社　1967年　315 ～ 358頁

(11) 廣田律子「来訪する鬼と翁」『折口信夫・釋迢空—その人と学問』おうふう　2005年で翁の語りの日中比較を行なった。
(12) 鈴木正崇『神と仏の民俗』吉川弘文館　2001年　321頁
(13) 新化県洋溪鎮で同様に行なわれる開山の問答が記録化されていたものを訳す。
泰国栄『上海広闡宮儺事』国際炎黄文化出版社　2007年　224 ～ 232頁
(14) 折口信夫「日本文学の発生」『日本文学講座』全集七　67頁、「鬼の話」『折口信夫全集』第三巻　10頁、「国文学の発生」『折口信夫全集』第一巻　139頁等
(15) 西村亨編『折口信夫事典』大修館書店　1988年　107頁　名辞「かけあい」の総括の項